

1 研究主題・副主題

平成29・30年度 韮崎市教育委員会指定

グローバル化に対応した子どもの育成

～主体的・対話的で深い学びを通して～

(1) グローバル化とは

情報通信技術の進展、交通手段の発達による移動の容易化、市場の国際的な開放等により、人、物材、情報の国際的移動が活性化して、様々な分野で「国境」の意義があいまいになるとともに、各国が相互に依存し、他国や国際社会の動向を無視できなくなっている現象ととらえることができる。この現象がいわゆる「グローバル化」である。特に「知」はもともと容易に国境を越えるものであることから、グローバル化は教育と密接な関わりをもつ。さらに、「国際化」はグローバル化に対応していく過程ととらえることができる。教育分野では、諸外国との教育交流、外国人材の受け入れ、グローバル化に対応できる人材の養成などの形で、国際化が進展している。

(2) グローバル化と教育の関係

知識基盤社会化やグローバル化は、アイデアなどの知識そのものや人材をめぐる国際競争を加速させるとともに、製造業等の海外移転による国内雇用の変化をもたらしている。また、異なる文化との共存や国際協力の必要性を増大させている。

また、事前規制社会から事後チェック社会への転換が行われており、社会経済の各分野での規制緩和や制度改革が進んでいる。これらを背景に進展している競争社会において、自己の能力を発揮し社会に貢献するためには、基礎的・基本的な知識・技能は陳腐化しないように常に更新する必要がある。生涯にわたって学ぶことが求められており、学校教育にはそのための重要な基盤づくりの役割も期待されている。

同時に、「共存・協力」も必要である。国や社会の間を情報や人材が行き交い、相互に密接・複雑に関連する中で、世界や我が国社会が持続可能な発展を遂げるためには、環境問題や少子高齢化といった課題に協力しながら積極的に対応することが求められる。このような社会では、異文化を背景に持つ者や自然と共に生きることが出来る寛容な精神を涵養することが求められる。

また、グローバル化の中で、自分とは異なる文化や歴史に立脚する人々と共存していくためには、自らの国や地域の伝統や文化についての理解を深め、尊重する態度を身に付けることが重要になっている。

(3) グローバル人材とは

グローバル化が進展している世界の中で、主体的に物事を考え、多様なバックグラウンドを持つ同僚や取引先、顧客等に自分の考えをわかりやすく伝え、文化的・歴史的なバックグラウンドに由来する価値観や特性の差異を乗り越えて、相手の立場に立って互いを理解し、さらにはそうした差異からそれぞれの強みを引き出して活用し、相乗効果を生み出して、新しい価値を生み出すことができる人材。

世界的な競争と共生が進む現代社会において、日本人としてのアイデンティティを持ちながら、広い視野に立って培われる教養と専門性、異なる言語、文化、価値を乗り越えて関係を構築するためのコミュニケーション能力と協調性、新しい価値を創造する能力、次世代までも視野に入れた社会貢献の意識などを持った人間。

(4) 主体的とは

主体的

学ぶことに興味や関心を持ち、自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら、見通しを持って粘り強く取り組み、自己の学習活動を振り返って次につなげる「主体的な学び」が実現できているか。

子ども自身が興味を持って積極的に取り組むとともに、学習活動を自ら振り返り、意味付けしたり、身に付いた資質・能力を自覚したり、共有したりすること。

(5) 対話的とは

対話的

子供同士の協働、教職員や地域の人との対話、先哲の考え方を手掛かりに考えること等を通じ、自己の考えを広げ深める「対話的な学び」が実現できているか。

身に付けた知識や技能を定着させるとともに、物事の多面的で深い理解に至るためには多様な表現を通じて、教職員と子どもや、子ども同士が対話し、それによって思考を広げ深めていくこと。

(6) 深い学びとは

深い学び

習得・活用・探究という学びの過程の中で、各教科等の特質に応じた「見方・考え方」を働かせながら、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見いだして解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりすることに向かう「深い学び」が実現できているか。

子どもたちが各教科等の学びの過程の中で、身に付けた資質・能力を活用・発揮しながら物事を捉え思考することを通じて、資質・能力がさらに伸ばされたり、新たな資質・能力が育まれたりしていくこと。

（7）道徳科における「主体的・対話的で深い学び」

＜主体的な学びとは＞

授業とは、知識や技能などの学問を授けることと言われている。授業を構想する際には、どのような知識や技能などをどのように学ばせるのかを明確にすることが求められている。授業は、授業者である教師が主となって指導するものである。授業者である教師が、学習者である児童に考えさせるべきことや身に付けさせるべきことを明確にして授業を構想しなければならない。

このように授業を主導するのは教師であるが、授業の中で行われる学習は児童が主体的に行うことが求められる。児童の主体性のない学びは、児童が知識や技能などを獲得する必然性を感じられなかったり、十分な切実感をもてなかったりするために、学習効果が得られにくい状況に陥ってしまうからである。児童は教師が設定した問題を自分の問題として切実感をもって捉え、その追究や解決を必然性をもって行うことによって、知識や技能などを効果的に獲得することが期待できる。

道徳科の授業では、児童が学習対象としての道徳的価値を自分との関わりで理解し、道徳的価値を視点に自己をみつめ、自己の生き方についての考えを深めることで、道徳性を養うことが求められるのである。道徳科における主体的な学びとは、児童が自分自身と向き合い、道徳的価値やそれに関わる諸事象を自分事として考えることとすることができる。

＜対話的な学びとは＞

道徳的価値の理解は、道徳的価値やそれを実現することのよさや難しさ、それに関わる多様な考え方、感じ方を理解することである。こうした理解を観念的ではなく、自分との関わりで実感を伴って行うことが重要である。

相手の立場や気持ちを考えて親切にすることのよさを理解するためには、児童自身が親切という道徳的価値についての価値観、つまり親切についてどのような考え方、感じ方をしているのかを認識することが求められる。親切の意義やよさの受け止め方は、児童のこれまでの経験によって多様である。ある児童は、自分が親切にされたときの温かさ、うれしさから親切のよさを認識していることが考えられる。また、ある児童は、自分が電車に乗っていたとき高齢者に席を譲ったことで謝意を受けた喜びから親切のよさを認識していることも考えられる。

親切のよさや意義を理解するためには、まずもって親切という道徳的価値が自分と関りがあるという認識をもつことが重要になる。このことが自分の意志で親切について考えようとする主体的な学びの基盤となるのである。そして、自分自身の道徳的価値に対する考え方、感じ方を吟味して、道徳的価値のよさや意義についての考えや自分自身の思いや課題を広げたり、深めたりすることで、自己の生き方を深めるようにすることが求められる。

道徳的価値に対する考え方、感じ方を吟味する際には、道徳的価値やそれを含んだ事象を一面的に捉えるのではなく、多面的・多角的に考えることが大切である。つまり、自分の考え方、感じ方の他にも、多様な感じ方、考え方があることを知り、それらと自分の考え方、感じ方を比較したり、検討したりすることによって、道徳的価値についての自分の考え方、感じ方のよさや課題を把握することができる。そして、このことが人間として生き方についての考えを深めることにつながるとともに、よりよく生きようとする意欲や態度を形成することになる。このような深い学びに必要なことは、多様な考え方、感じ方に会うことであり、そのため対話的な学びが必要になるのである。

＜深い学びとは＞

児童が自らの意志でねらいとする道徳的価値を視点に自分自身と向き合い、自分の考え方、感じ方を明らかにし、その上で、教師や友達などとの対話や協働を通して考え方、感じ方の多様性に気付く。道徳的価値やそれに関わる諸事象を多面的・多角的に考えることで自分自身の考え方、感じ方を深めることが、道徳的価値に関わる思いや課題を培うことにつながる。児童自身が「自分はこうありたい、そのためにはこのような思いを大切にしたい、このような課題を解決したい」などの願いをもてるようにする学びが深い学びである。

主体的・対話的な学びを深い学びにつなげるためには、道徳科の目標に示されている通り、自己を見つめ、自己の生き方についての考えを深める学習を行うことである。児童は道徳的価値の理解を実感をもって行うことで、自己を見つめたり、自己の生き方を考えたりする学習を行っていると言える。このような学習をより確かなものにするためには、道徳的価値を視点に自分自身の具体的な経験やそれに伴

う考え方、感じ方を想起し、道徳的価値に関わるよさや課題を把握することができるような学習を設定することが求められる。このことで一連の学習が深い学びにつながるのである。

2 研究主題・副主題設定の理由

(1) 本校の実態から

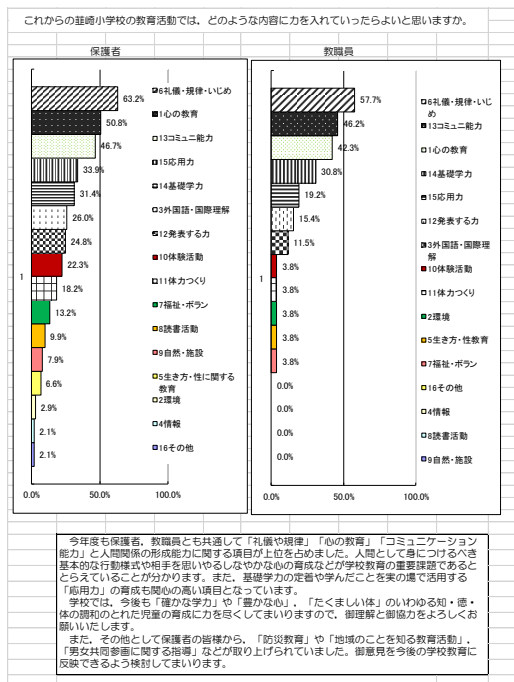
本校は平成27年度から29年度の3年間、文部科学省「外国語教育強化地域拠点事業」の指定を受け、外国語教育を中心とした研究に取り組んできた。そこでは「相手意識・目的意識」に重点を置き、言語活動の充実を通して児童の思考力・判断力・表現力を育めることが明らかになり、着実に英語力も身に付いてきている。

しかし、中には様々な特性を持った児童もいる。学校生活における自分自身の問題に対して最後まで粘り強く立ち向かえなかつたり、時として友達に反発的な態度を取ったりする面も見受けられる。また、道徳の授業に目を向けると、自己の思いや考えを表現できずにいる子どもが見受けられる。そのために、自己を振り返ることや、これからの生き方を考えられず、道徳的実践力に結びついていない児童もいる。このことは教師の指導方法にも課題があると考えられる。これらを改善するために、全校職員が丸となって道徳教育の在り方について見直し、児童の道徳性の発達を促すために、指導過程や学習活動の工夫をすることが必要である。

また、昨年度の全国学力学習状況調査の質問紙調査からみえる本校児童の姿として、「いじめ」について全ての児童がどんな理由があってもいけないと思っていることがわかった。しかし、「ものごとを最後までやり遂げ、うれしかったことがある」児童が、県や全国に比べて少なく、自己肯定感が低いことが課題として挙げられた。この実態の傾向は以前から見られ、「特別の教科道徳」全面実施に向け、上記指定の研究と平行して理論研究を進めてきた。

<H29 保護者アンケート結果>

<H29 教職員評価>



No.	項目	そう思う	大抵そう思う	どちらでもない	そう思わない
1	学校生活が楽しくなるように、指導したり配慮したりしている。	50.0	50.0	0.0	0.0
2	児童が基礎基本を身に付けられるように指導している。	58.3	41.7	0.0	0.0
3	朝読書の実施や学校図書館の利用など、読書環境づくりに努めている。	41.7	45.8	8.3	4.2
4	児童から質問や意見を引き出す工夫をしたり、児童が発言しやすい雰囲気を作成したりしている。	37.5	62.5	0.0	0.0
5	友達、教職員や地域の方へ、礼儀正しく挨拶をするように指導している。	62.5	37.5	0.0	0.0
6	誰とでも仲良くすることの大切さを指導している。	66.7	33.3	0.0	0.0
7	学校の法まりや約束を守るように指導している。	75.0	25.0	0.0	0.0
8	自分の学用品や公共物を、大切に使うように指導している。	62.5	37.5	0.0	0.0
9	早寝・早起き・整った食事を実行するように指導している。	50.0	40.9	9.1	0.0
11	学校よりや学年よりなどを渡すときに、内容について説明している。	27.3	59.1	9.1	4.5
13	個に応じた指導や教材・教具の工夫などを心がけ、分かりやすい授業に努めている。	43.5	56.5	0.0	0.0
14	いじめに迅速に対応したり児童の相談に気軽に応じたりして、児童の心のケアに努めている。	58.3	41.7	0.0	0.0
15	次の九つの項目の中から、本校がこれから重点的に取り組むべきものを三つ選んでください。				
	道徳教育	78.3			
	外国語教育	34.8			
	情報教育(プログラミング教育など)	26.1			
	福祉教育(インクルージョン教育など)	39.1			
	安全教育	13.0			
	消費者教育(金融教育など)	8.7			
	読書教育	30.4			
	食育	13.0			
	体力づくり	39.1			

昨年度のアンケートから、保護者・教職員ともに「礼儀や規律」、「心の教育」など、道徳的実践力、人間関係形成能力に関わる項目が上位を占めている。

人間として身に付けるべき基本的な行動様式や相手思いやゆるしなやかな心の育成などが、本校の重要課題であると捉えられる。

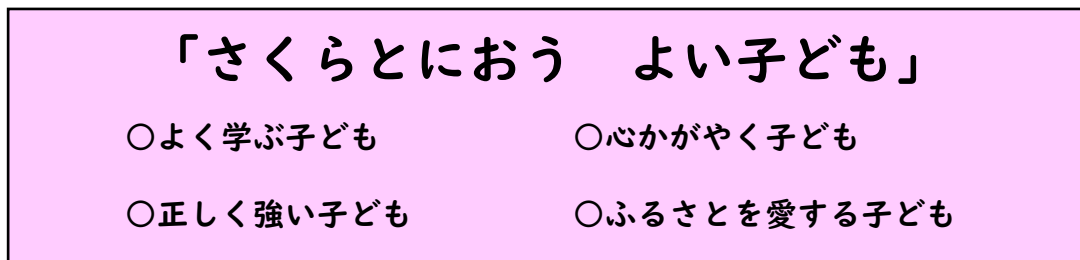
(2) 教育の今日的諸課題から

現代社会は、国際化・情報化・環境問題への関心が高まり、少子高齢化等の様々な面で大きく変化している。また、グローバル化が進み、科学技術が大きく発展し、物質的に豊かで便利な生活を手に入れた反面、人々が社会生活を営む上で大切な規範意識が低下したり、人間関係が希薄化したりする傾向が見られる。子どもたちを取り巻く環境も大きく変化し、犯罪の低年齢化、痛ましい事件や事故が多発する傾向にある。これらの背景には、社会全体のモラルの低下や子どもたちの社会経験や生活経験の不足、家庭や地域の教育力の低下といったことも大きく影響していると言われている。このような現状の中、子どもたちが心豊かにたくましく生きるために、様々な文化や多様な価値観を背景とする人々と互いに尊重し合うことや、他者と対話し共存・協力して、よりよい方向を目指す資質・能力を備えることが一層重要になってくる。

今年度から「特別の教科 道徳」が全面実施となった。より計画的に実践していくことが必要である。上記に述べたように、子どもを取り巻く社会状況の変化や規範意識の低下、生命を尊重する心情を育てる必要性などから、自己の生き方を見つめ、他者との関わりを深めながらたくましく生きる子どもを育てる道徳教育の在り方を追究しなければならないと考えた。そして、グローバルな社会で生き抜くため、生涯にわたって学ぶ子どもの育成が求められている。このことを受けて、本年度の校内研究では昨年度の研究主題を引き継いで、「グローバル化に対応した子どもの育成」と設定した。

(3) 学校教育目標の具現化から

本校の学校目標は、以下の通りである。



「さくらとにおう よい子ども」とは本校校歌の歌詞の一節であり、作詞をした本校卒業生で東京大学の国文学者であった小池藤五郎先生の「美しい花のように生き生きとした魅力が内面からあふれ出ている素晴らしい子ども」になろうという思いを推察して設定したものである。また、それを具体化する4つの目標は、知・徳・体の調和のとれた心身ともに健やかな子どもの育成を目指すものである。

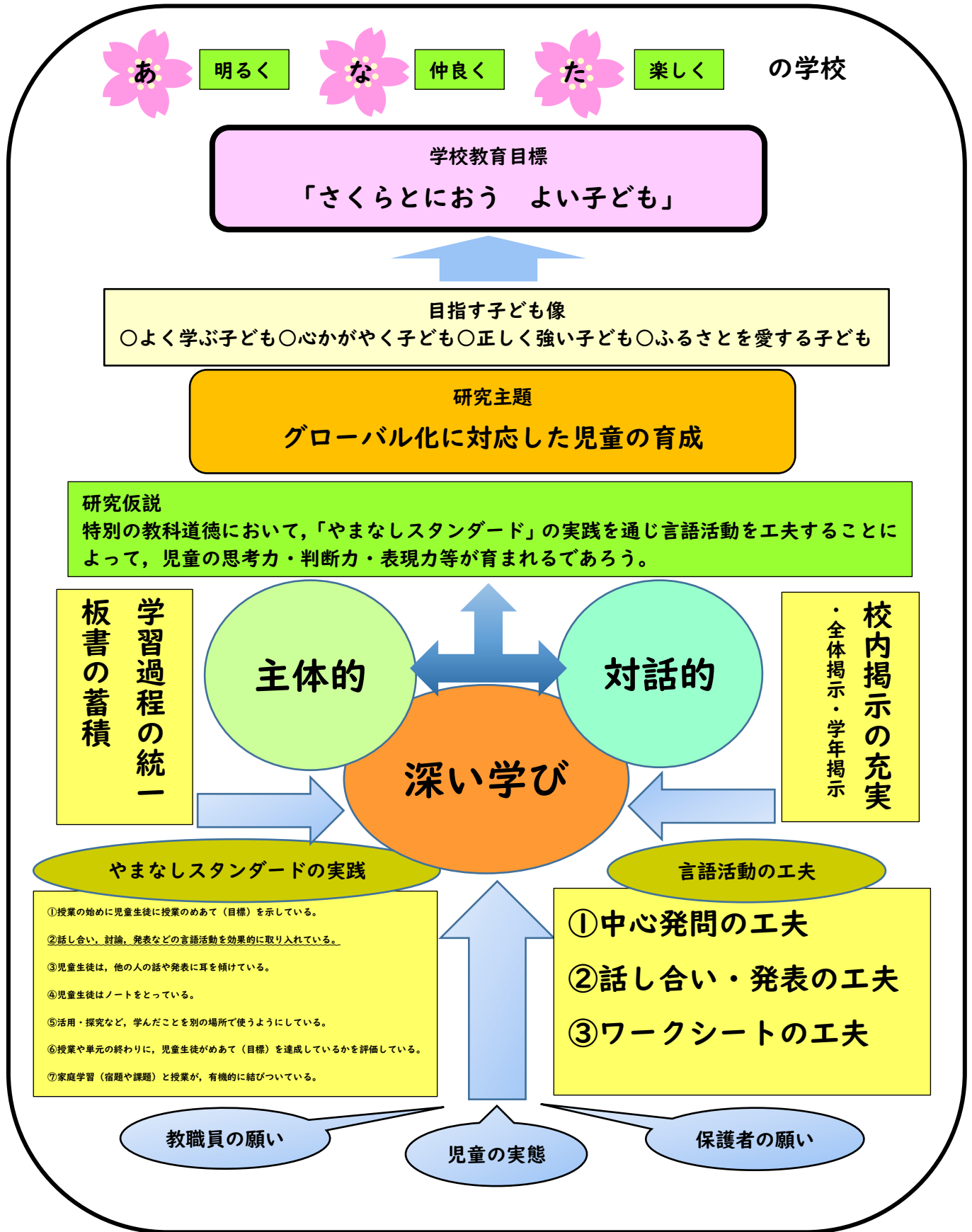
本校では学校教育目標を受けて、道徳教育目標を「よりよく生きるための基盤となる道徳性を養うために、多面的・多角的に考える学習を通して、道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度を育てる」と設定し、子どもによりよく生きるための基盤となる道徳性を養うことをめざしている。学校の教育活動全体で行う道徳教育によって、子どもたちが相手の立場に立って考えることや、規範意識を高めていくことなどの道徳的価値の大切さに気付き、日常の中で生かしていけるような道徳的实践力を身に付けることで、相手を尊重する態度や思いやりの心を培えるのではないかと考える。

以上、主体的・対話的で深い学びを通して、知識・技能を活用し、思考力・判断力・表現力を育むことによって、「グローバル化に対応した子どもの育成」を図り、学校教育目標「さくらとにおう よい子ども」に迫ろうと考えた。

3 研究仮説

特別の教科道徳において、「やまなしスタンダード」の実践を通じ、言語活動を工夫することによって、児童の思考力・判断力・表現力等が育まれるであろう。

4 研究構想図



5 研究内容

(1) 資料の読み取りと中心発問の工夫

道徳の時間における発問の中で、特に「中心発問」を吟味し、資料に登場する人物の行動を支える道徳的な価値を的確にとらえさせなければならない。その中でも「中心発問」、言い換えれば「身に付けさせたい内容項目」に一番影響を及ぼす発問の精選に重点を置いた。さらに、「中心発問」に到達するまでの資料の読み取りの工夫が必要であると考えた。そこで、「中心発問」と「資料の読み取り」の連動をどう工夫するかなどについて各学年、研究ブロック、全体会等で議論を重ね、授業実践を通して検証していくこととした。資料が多くなる高学年では事前に読む時間を確保し、中心発問など話し合いへの時間を十分に確保することとした。

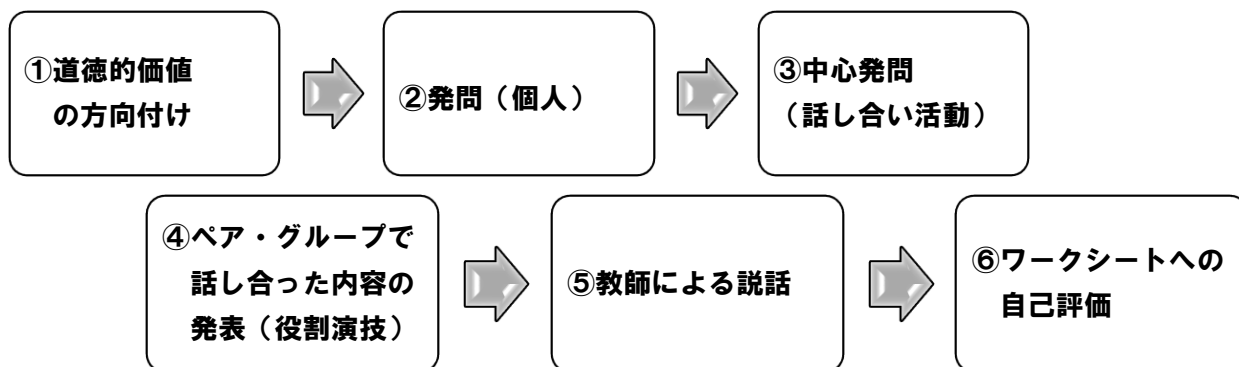
(2) 話し合い・発表を取り入れた指導の工夫

道徳の授業において、子どもの素直な心を拓くために子ども同士の交流を通して考えを深めさせていきたい。その具体的な子どもの姿として「自分の考えを持ち、たくさん発言し、友達相互の意見交換などで相手の考えに賛同したり、修正したりすることができる」児童を目指している。そのためにペアや小グループ、学級全体で話し合い、発表する時間を毎時間設定することで、自分の考えを伝えたり、友達の考えを聞いて自分の考えを修正したりする機会を仕組むようにした。

(3) 自分の考えを書くためのワークシートの工夫

振り返りにおける言語活動は自己を見つける上で非常に大きな役割を果たすことになる。その言語活動とされているものには多くの方法がある。その中で、「自分の考えを書く」活動を授業の終末に毎時間設定した。ワークシートには学年や学級の実態に応じて、みんなのどうとくのワークシートをアレンジし発問を設定した。また、自分の考えを持っていない子どもには、何人かの子どもの発言を参考にしながら、自分の思いを書きやすくさせた。そして、全体交流の中で友達の多様な考えに触れることで、自分の価値観の深まりや広がりを感じ取らせた。特に「書く」言語活動は、自分の考えを明確にするとともに、振り返るべき自分の行動や経験を明確に思い出す手助けとなるものである。そこで、中心発問を問いかけたあと、十分に書く活動を設け、自分自身の考えをもち、価値項目に迫ることができるようにした。工夫したワークシートを使い、ペアやグループの友達と意見を交流する場を設け、自分の考えに自信を持ったり、いろいろな考え方に触れたりすることができるようにした。そして、上記終末の書く活動で自己評価をさせることで、教師は「主体的・対話的で深い学び」ができたのかを見取り、継続的に把握できるようにした。

(4) 学習過程の統一



(5) 板書の統一

第〇回 どうとく 日付 教材名	導入 ・ 道徳的価値に関する内容の提示	展開 登場人物への自我関与 ・ どうして主人公は〇〇という行動を取ることができなかったのでしょうか。 ・ 主人公はどういう思いを持って△△という判断をしたのでしょうか。 ・ 自分だったら主人公のように考え行動することができるのでしょうか。	終末 ・ 本時を振り返り、本時で学習したことを今後どのように生かすことができるかを考える。 ・ 道徳的価値に関する「問い」に対し自分なりの考えをまとめる。 ・ 感想を聞き合い、ワークシートへ記入したり、学習で気付いたことや学んだことを振り返る。
--	-------------------------------	--	--

(6) 評価方法

評価について、学習指導要領には以下のように記載してある。

「児童生徒の、学習状況や道徳性に係る成長の様子を継続的に把握し、指導に生かすよう努める必要がある。ただし、数値による評価は行わないものとする。」

つまり、継続的な見取りが必要になってくるのである。また、児童の到達状況を評価するのではなく、学習状況や道徳性に係る成長の様子を継続的に把握していくことが求められている。児童のよい点をほめたり、更なる改善が望まれる点を指摘するなど、児童の発達段階に応じ励ましていく個人内評価を行っていくこととした。

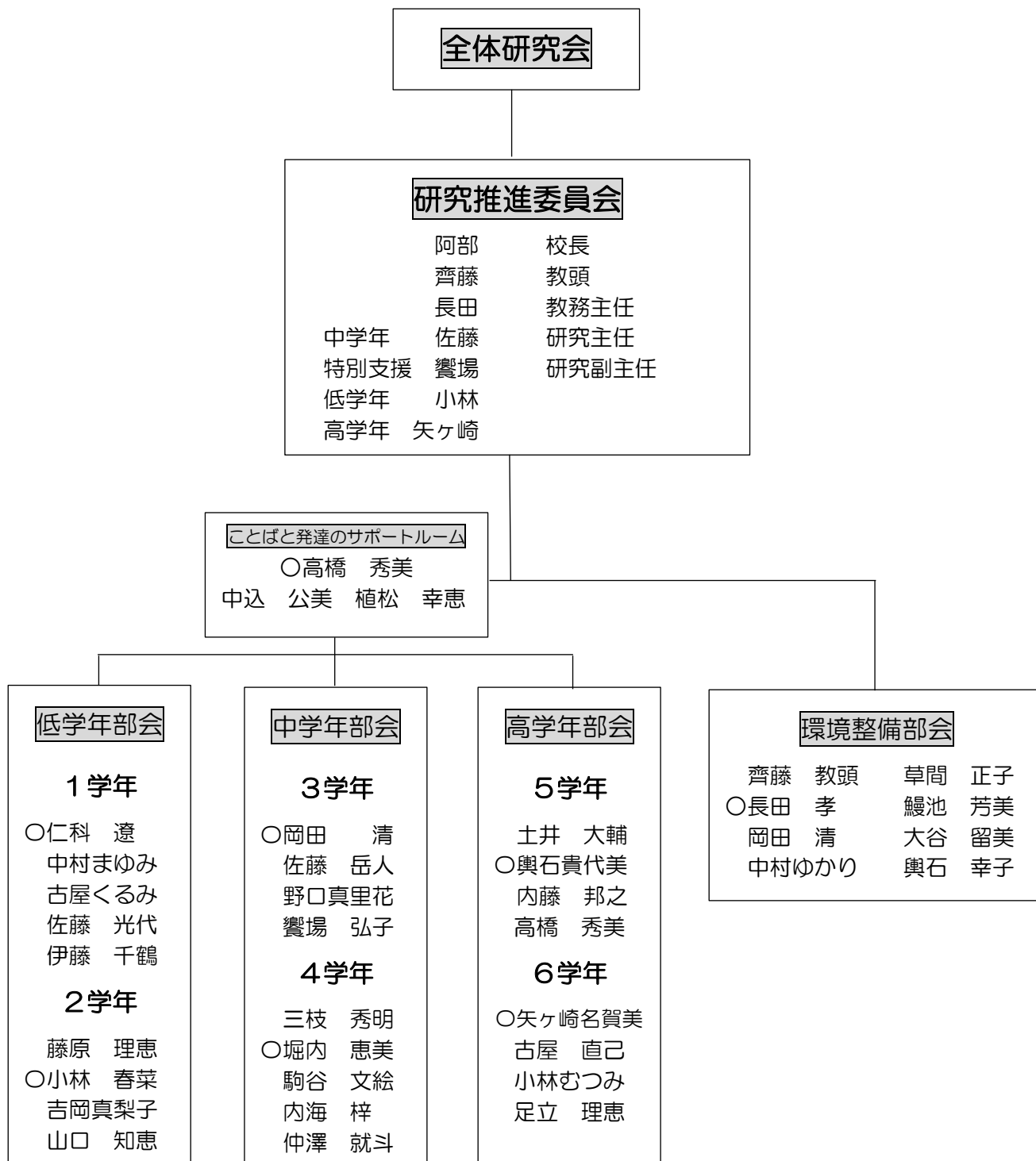
具体的には、毎時間児童が書いた道徳ワークシートに対して教師からのコメントを入れ、個人ファイルに綴じていき児童の変容を見取ることとした。ファイルに蓄積していくことで継続的に児童の変容を確認し、評価に生かした。

6 検証方法

①授業研究会による学習過程、指導法等について授業観察を通して検証していく。

②道徳アンケート、毎時間のワークシート等を書かせ、児童自身の自己評価をもとに検証していく。

7 研究組織



8 環境整備

道徳学習の足跡を掲示し、いつでも振り返ることができるようにした。今までの学習とつなげながら自分を振り返る場面や特別活動を行う際に掲示を活用することで、道徳学習で学んだことを生かすことができる考えた。

参考文献

- ・グローバル化と教育に関して議論していただきたい論点例 文部科学省 2009年1月
- ・産学人材育成パートナーシップグローバル人材育成委員会 2010年4月
- ・産学連携によるグローバル人材育成推進会議 2011年4月
- ・山梨県教育委員会義務教育課ホームページ
- ・道徳科授業の新展開 2018年2月 東洋館出版社